

県研究主題

具体的な活動や体験を通して気づきの質を高める学習活動を充実し、生活科学習の特質を生かした学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 奥田 由美子(横須賀地区)

〈研究主題〉

自分の考えを持ち、表現できる子の育成

～子どもから願いを生み出す生活科の学習をめざして～

1 提案内容

これまでの実践を振り返り、ただ活動したり観察したりするだけでは発見や気づきが生まれにくいと思い、学習活動の中に「願い」が重要だと考えた。学習意欲に支えられた「願い」を生み出すための学習活動を考えることで、自らの考えをもちそれを表現できる子につながるのではないかと考え、研究を進めていくこととした。

(1) テーマについて

子どもたちが「自ら表現できる」ことができるようにするためには、自分なりの発見や気づきがあり、それをさまざまな人たちに『伝えたい・知らせたい・わかってもらいたい』という思いや願いをもつことが必要である。そのような思いをもつことができる学習活動をするためには、活動の視点を明らかにし、児童が活動に心を寄せていくためのしかけが大切であると考えた。

① 「子ども 110 番」の家（ピーガル君たんけん）を材に選んだ理由

教師自身が秋のまちたんけんの前にまちを歩き、たくさんあるピーガル君マークに着目した。そして学習を通して安心・安全教育を進める中で、看板を付けているまちの人の思いや支えてくれる人々の存在に気付かせたいと考えた。

② テーマについて

子どもが事象に対して主体的に働きかけ、活動に熱中することが質の高い気づきや発見を生む。そのために強い「願い」をもつことが、自らの考えや表現につながると考え、テーマにせまるための二つの手立てを考えた。

(2) テーマに迫るための手立て

① 事象提示による手だて

願いをもたせるためにはどのような事象にどのように出会わせるかが重要であり、かべ（ハードル）を作る必要がある。事象提示による手だての流れとしては、

ア：目標の把握→イ：事度の実態の把握→ウ：事象の選定→エ：事象との効果的単元な出会いの場の設定→オ：かべ（ハードル）を作る

という過程を経て児童「願い」が生み出されるのではないかと考えた。

③ 表現の工夫による手だて

子どもたち同士が考えを共有する際、自分の思いを思う存分表現できる方法として「話す・書く・描く・体で表す・作る」等の方法を支援した。表現の楽しさを体験させるために教師自身がとにかく『よく聞く』ことを心がけ、児童に満足感を持たせた。

(3) 授業実践 単元名「野比の町探検」(11時間扱い)

- 単元目標に安全・安心の視点を入れ、内容(1)と(3)とした。児童は春・夏の探検とは違った視点で探検を行ったことで、これまでとは違った町の側面を感じることができた。
- ピーガル君は子どもたちに親しみのあるキャラクターであり、児童は夢中になってピーガル君を見つけてまちたんけんを進めていった。これまで学習に対しては受け身的だった児童も意欲的に学習を進めることができた。
- まちの人とのかかわりも深まり、授業参観では多くの発言や子ども同士の意見の聞きあいが見られた。子ども自身が町や町の人に対する強い願いをもつことができた。

2 協議内容

① 提案内容についての質問・意見

・まちたんけんの実施にの際は子ども同士(グループ)で行ったのか

→その時々めあてや内容に合わせ、全体で行ったりグループで行ったりした。

・ワークシートはどのようなものか。

→上に絵が描けて、下に文を書くための罫線を引いたカードを探検バックに挟んで出かけた。シートの裏に自由に書いている児童もいた。

・壁を作るための教師の具体的な発問はどんなものだったのか。

→まちたんけんに行く時、「お気に入りを探そう」という漠然としたものではなく、「ピーガル君」を前面に出した投げかけをした。

・児童の変容の様子はどうだったか。

→気になっていた数人の児童が夢中でピーガル君を探し、進んで発表できた。

やる気が出て教師とのつながりも深まったので、よく質問するようになった。

どの子もこの単元を通して、野比のまちの人々への思いが深まった。

・まちの協力や学校全体としてお願いしてきたことは？

→学校とまちには古くからのつながりがあり、まちたんけん以外にもいろいろな側面で協力していただいている。普段からの付き合いがあつてこそ、この単元の中で更につながりが深まったのではないかと思う。

② 「学級つくりと生活科」という視点にそった協議

○生活科は他の教科ではなかなか活躍できない子も活躍できることが多い。他の子の意見を聞き、自分との違いや友達への気づきにつながることも多い。そういう意味でも生活科の学習は友達づくりや学級づくりにつながっている。

○大きな地図などの掲示物を通して、みんなで課題を解決してきたという達成感が子どもの中にあることで、生活科を通した学級づくりが進んでいく。

3 まとめ

○学級づくりという視点から考えると、教師が子どもたちの話をよく聞き思いを受けとめていくことで、児童が満足感のある活動ができ、学級づくりにつながっていく。

○授業の中で学級づくりをしていく為には「①自己存在感②共感的な人間関係③自己決定を授業の中に用意する」ことが必要である。本実践にはその要素が見られた。

○気づきの質への誤解を解く必要がある。配布した資料を確認して欲しい。授業を通して、気づきの質を高めていくことをめざしていきたい。

〈研究主題〉

実感を伴った活動による、子どものやってみたいが広がる授業づくり
～遊びから学びへの変容を目指して～

1 提案内容

具体的な活動や体験を通して、気付きの質を高める学習活動を充実し、生活科学習の特質を生かした学習指導と評価の工夫・改善を目指した。具体的には、一人ひとりの児童自身の気付きの質を高め、活動や体験を一層充実するための授業展開の工夫・改善について、研究を深めていくことにした。

(1) テーマについて

① 紙飛行機を題材に選んだ理由

遊びの中で発見したことを生き生きと話す姿から、紙飛行機には気付いたことを伝えたい要素がたくさんあり、題材として面白いのではないかと考えた。

② テーマについて

遊ぶ→気付く→伝えるが休み時間の活動であるならば、授業では何を目標せよいかを考えるために、「遊びから学びへの変容を目指して」をサブテーマとした。子どもたちが何に気付いたのかを教師が細やかに見取り、それらをどのようにつないでいくことが、よりよい学びをつくっていくことになるのかを追究した。

(2) テーマに迫るための手立て

① 気付きの見取り

児童が自分の気付きを自覚することによって、表現として外側に発信されていく。そのことによって、交流が活発になったり、教師の見取りも的確になったりする。児童が気付きを自覚していけるような手立てをとっていく。

(活動中の写真や映像の活用、学習カードの工夫、紙飛行機の保管方法)

② 気付きのつなげ方

子どもたちの思いは、ただ遊ぶだけの活動から、遊びの中で得た気付きを表現していく中で、広げる、比べる、試す、深める、繰り返すなどの目的をもった活動へと発展していく。子どもたちがどんなことに気づき、次にどんな活動をしていきたいのかを気付きの中から見取り、「子どもたちの思いやねがい」を柱に授業を展開していく。

(3) 授業実践 単元名「紙飛行機であそぼう」(10時間扱い)

自由に作って遊ぶ活動の後に、「思ったところにまっすぐ飛ぶ紙飛行機を作ろう」という共通のテーマを設定して学習を進めた。目的を明確化することで、面白いからやる活動から目的をもった活動へと転換を図り、活動の中で生まれる思考や気付きを整理することで、より学習の目的が達成されると考えた。

2 協議内容

- ・授業の組み立てを、子どもの思いからやろうとしていたのがよかった。休み時間における子ども同士のかかわりはどうだったか。
- ・没頭する、工夫する、遊びあう。子どもたちが夢中になる姿は、良いことだった。

子どもたちとのかかわりの具体的な姿をもっと知りたい。

- 体育館で遊びたいという訴えを受け、休み時間に体育館で活動した。材料と場を設定してあげると、活動が広まった。やってよかったのは、日ごろ目立たない子でも、その子の活動をみんなで認め合えたこと。一人でいることが多かった子が、友達と一緒に活動するようになったのは、素材がもつよさだった。
- ・ワークシートは丁寧だったが、満足度を表す言葉は、それぞれの子で違うので、自由に考えられる余地があってもよかった。
- ワークシートの形式は、自由記述では書けない子もいるので、どのようなワークシートが適切なのか今でも悩んでいる。
- ・「遠くまで飛ばす」というクラス目標だったが、自然にいろいろな紙飛行機を作りたいという思いになっていたのではないか。そのことを踏まえて、指導計画を検討し直してみるとよいのではないか。

3 まとめ

- ・気付き、見取り、つなげるがキーワードだった。気付きの質を高めるために、「ふり返り表現する」「伝え合い交流する場を工夫する」「試行錯誤や繰り返す活動を設定する」今日の提案には、このような手立てがたくさん設定されていた。
- ・見取りについては、つきたい力の明確化が大事。これに伴って、どう見取るのか。一人一人の個性を把握し、子どもの実態をしっかり把握していくことが大事。
- ・つなげるは、子どもに共感し、子どもの気付きを取り上げ、価値付けたり意味付けたりしてあげることが大事。
- ・学習カードは、一つの単元の中でもいろいろあってよいのではないか。ねらいを明確にしておくことや、次につなげる方向性も大事。

4 協議の柱に即した協議（グループ協議）

（1） グループ協議の報告

- ・新学習指導要領に沿った年間指導計画・評価計画について
活動はクラスで流動的でも、評価は学年で具体の姿を出し合う。2年間を見通して作られることが望ましい。評価も一体となった計画を立てたい。その都度見直していくことが大事。内容はバランスよくする。スタートカリキュラムは、明文化しておく。
- ・言語活動の充実について
他教科で経験したスキルをもとに関連させて行う。表現したくなるような活動を設定する。呟きを指導者が拾ってあげる。書かれたものからどう見とるかが大切。子どもたちの多様性を生かして、多様な表現活動を保障してあげる。

（2） 助言

言語活動が目的になってないか。体験が豊かなら言語活動は充実する。子どもは、問題を解決して気付きを得る。これを繰り返すと気付きが深まる。見取りと支援は表裏一体。個の見取りをつなげるとき時に大事なのが言語活動。子どもが安心して表現できる、自己肯定感をもてる学級作りが大事。価値付けるとは評価すること。これが意図的、計画的に行われるために評価基準がある。評価は、自分の指導を見直す機会でもある。評価基準をどの程度具体の姿に置き換えられていたかが大事。